

専攻		学籍番号		指導教官氏名	
申請者氏名	森 一 彦				

論 文 要 旨

論文題目	複合的な集会施設における探索行動の研究
------	---------------------

(要旨 和文 1,200 字程度)

( 1 )

本研究は、「複合的な集会施設をはじめて訪れる利用者がエントランスから入り、目的室に関する情報を得て、目的室まで到達する問題解決過程」の探索行動を研究課題とし、「視認」・「推測」・「探索方法」・「場面(シーン)」等の認知心理学的な概念を応用して探索行動を分析することで、空間を評価して、「空間の分かり易さ」のための空間計画方法を明らかにすることを目的としている。具体的には、探索行動における「ばらつき度」・「探索方法」・「場面」・「迷い行動の因子」の4項目について順次分析し、最後のまとめとして複合的な集会施設における「空間の分かり易さ」のための空間計画方法を考察した。「探索行動のばらつき度の分析」として、情報空間におけるサイン情報の情報密度との相関を分析し、情報密度の高さが探索行動にあたえる影響を明らかにした。サイン情報の情報密度が高い場所ほど探索行動のばらつき度が小さくなることを明らかにした。

「探索行動における探索方法の分析」として、廊下型・ホール型の2種の施設において、それぞれ「案内板・方向板のある情報空間」と「案内板・方向板のない情報空間」の計4種の情報空間について探索行動実験を行い、各情報空間ごとに“被験者の視認・思考”の詳細な分析によって、探索方法と空間情報との整合性を分析し、迷

5

10

15

20

22

5

10

15

20

26

い行動の発生状況やその要因を分析した。探索行動における探索方法と情報空間とがうまく整合しないと「見落とし」・「誤認」や「経路間違い」・「後戻り」等の迷い行動が発生することを明らかにした。「探索行動における「場面」の分析」として、「探索行動における探索方法の分析」で分析した探索行動の過程を経路選択場面・経路進行場面・到達場面の3つの場面に分割し、各場面が行われた領域を分析することで、迷いの生じやすい場所を特定し、それを基に空間評価を行った。特に「場面」の順序が逆転する場所や経路選択場面の領域が広がっている場所等から、迷い行動が生じやすい場所を特定でき、それらから空間評価が可能となることを明らかにした。「探索行動における迷い行動の因子の分析」として、「探索行動における探索方法の分析」・「探索行動における「場面」の分析」の分析結果を基に迷い行動の因子を数量的に分析し、それを基に迷い行動の因子と情報空間との関連を明らかにした。迷い行動の因子には、案内板視認・方向板視認等のサイン情報視認以外にロビー見渡し・室類似推測・経路推測等があり、迷い行動の因子は空間内のエントランス・ロビー・目的室付近等の場所ごとにその影響が異なることを明らかにした。「探索行動からみた空間計画方法の考察」として、前述の探索行動の分析を基に実験施設の空間評価及び「空間の分かり易さ」のための空間計画方法の考察をした。